

「足利買場・67日間の航海を終えて」

足利まちづくり株式会社
代表取締役 赤間 透 氏

1. 足利買場（かいば）の概要

足利は明治維新後、町民が企業を興し、栄えてきた町ですが、特別な資源に恵まれていたわけではなく、都市文化の中で知恵を育み、ものづくりを行うことで発展してきたということで、栃木県の中では異質な文化を育んできた町だと思います。足利は「足利へ行けば繊維で飯が食える」と近江商人や新潟、東北から移り住んできた人によって形成された町なのです。その町で最近足利青年会議所の若いメンバーが取り組んだのが、「足利買場」というものです。

これは明治から戦後までにぎわった絹織物市場を足利市の十字屋跡地に再現したもので、2000年11月3日から2001年の1月8日までの67日間限定で、商工会議所と共同の中心市街地活性化事業の一環として実施したものです。敷地を消防上の配慮から3つのユニット（90坪）に分け、その各ユニットの中に1コマ6坪のテナントを入れました。構造は再利用可能な軽量鉄骨平屋建てとし、屋根は工事用のビニールシート、外壁は耐水性の石膏ボード、床は山砂敷込みにして、コストを抑えてあります。

物販系10、飲食系8のテナントと2つの展示室がメイン構成となっておりますが、全体のマネジメントは「足利まちづくり㈱」が行い、週1回の出店者ミーティングを通して、接客の基本姿勢、装飾、広告作成、ポスティング、グランドバザール、イベントなどの合意形成と意思決定を図りました。

営業時間は物販系で午前10時から午後8時まで、飲食系は午前10時から深夜0時までとしましたが、期間中の総来場者は約14万人、一日平均約2000人で、日曜祭日には3000人以上、オープン当初には約8000人に達した日もあります。



赤間 透（あかま とおる）

足利市青年会議所を経て1999年、足利まちづくり㈱を設立。2000年11月より明治から戦後までにぎわった絹織物市場「足利買場」を67日間という期間限定で再現し、足利中心市街地活性化の一役を担った。

主な来場者層は地元の高齢者および家族連れでしたが、東京、群馬、埼玉、千葉等、関東近辺からもご来場頂きました。浅草でチラシをまいたり、東武線沿線にポスターを貼ったりしたことが功を奏したと思われる。

2. 足利まちづくり㈱設立から足利買場事業取り組みまで

この企画の発端は1995年に遡ります。そのときから青年会議所が、全市的ではなく、中心市街に絞ってまちづくりを考えようという取り組みを始めたのです。翌年、「アメリカカー汚い町」から「住んでみたい町ベスト16」に変貌したチャタヌーガを視察しました。そこで、この町の再生の背後にはCDBG（コミュニティ開発包括補助金）という制度があるということを知ったのです。これは、官民パートナーシップで自ら描いたビジョンに対して、各省庁の壁をはずして包括的に資金を補助するという制度ですが、私たちは帰国後各方面の方々に働きかけを行いました。その後全国的に運動が展開し、1998年の「中心市街地活性化法」の制度化となったのです。

この補助金を受けるためには、まちづくりの基本構想計画を策定しなければなりません。私たちは早速「基本構想検討委員会」というものを作り、青年会議所の

メンバー20人から合計1000万円の出資をあおいで1999年9月2日に「足利まちづくり(株)」、9月25日にはNPOの「足利まちづくりセンター」が発足したわけです。しかし、私たちの提案した「官と民がお金を出し合うパートナーシップによるまちづくり」という足利方式は、行政側には受け入れられませんでした。TMOの認定を受けるためには3%以上の行政の出資、大きな補助金をもらうためには2分の1以上の行政の出資が必要です。事業実績もなく、ビッグプロジェクトの見込みもない段階ですから、これは当然のことでしょう。

このような中、商工会議所がカウントダウンイベントをやるので、それに乗らないかというお誘いを受けました。また、私は東京等で行われている「仮設型テナントミックス」というものにも興味を持っていたので、十字屋跡地1700坪の一部を借りて、商工会議所の足利ドームの側に私たちの足利買場を作ることにしたのです。

3. 足利買場というネーミングの発想

私たちはその意義を考える中で、「首都圏という市場も鑑みながら独自のテーマを導き出すべきである」と考えました。足利市は室町時代を築く足利氏の発祥の地ということと、日本中の優秀な人材が勉強に集まった足利学校が有名ですが、繊維産業が花開いた明治、大正、昭和初期には工業出荷高が日本一になっていることも忘れてはなりません。私たちの町が持っている自由闊達な雰囲気や粋な文化はそこから来るのです。買場とは当時の華やかな都市文化の時代に帰り、私たちが忘れていたものを発掘しようというアイデアです。

足利の近代に対する功績は3つあるといわれます。1つは両毛鉄道の敷設、2番目としては織物講習所(後の足利工業高校)を作ったこと、最後が足利銀行を作ったことです。実はその足利銀行を作ったのは、明治時代の20代の経済人で作った「友愛義団」という財団法人で、現在の「まちづくり」NPOのようなものでした。彼らは世界に通用するような商品づくりをしていくためには市民のモラル向上が必要だということで、街角に火災報知器を設置したり、廃娼運動をしたり、

英語学校や幼稚園を作ったのです。織物講習所も、当時、リヨン等で修業した京都の川島織物の工場長・近藤徳太郎氏を招いて、彼らが作ったものでした。また、足利銘仙は、川島理一郎という画家がパリに渡って当時のモダニズムを持ち帰り、バラの花などパリのデザインを和服に織り組み、まさに和魂洋才で生み出したファッションです。大正ロマンの華やかなりし時代に女性の社会進出が始まりました。そんな女性のおしゃれなタウンウェアとして日本中の女性の心をつかみ全国制覇を成し遂げたのです。

4. 67日間の航海の収穫

67日を終わっての感想は、まず、海のものとも山のものとも解らないものに、よく出店して下さったということです。店舗によっては利益を出された方もそうでない方もいると思いますが、運営における広報の難しさや、飲食系の集客のためにはチームワークが必要だということも学びました。

開催当初は毎日3時間程しか睡眠がとれず、最後まで体が持つのだろうかという不安もありましたが、近所のお年寄りが毎日のように差し入れをくれたり、周りの皆さんの応援のお陰で頑張ることができました。また、最後の夜に雪が降り、屋根が抜けないようにと屋根の鉄骨の上で一晩中雪かきをして、最終日の朝を迎えました。今、市内での行事の後などに、「買場があれば帰りに子どもと遊べるのに」という声はどこから聞こえてくることがあります。その時、改めてやってよかったなと思います。

情報化社会を背景に新しいライフスタイルを個人がデザインしようとしている時代を迎え、ビジネスの形態、集客施設のありかたにも既成の様式は限界にきています。物事を擬人化して生命や物語性を感じられるものを求めています。芸術性、文化性に趣を置き、単なる「金儲け」としてではなく、そこに哲学やスピリッツというものが込められたビジネスが、今後必要とされるのではないのでしょうか。

(開催日：平成13年2月26日(月))